

浄土

monthly
JŌDO

November 2002

11



大本山増上寺蔵・残欠二巻本〈重文〉

法然上人絵伝が 絵葉書になった!!

1セット8枚組

美装封筒入り

定価:800円

(本体+税)
送料別



菩提寺修学の図・牛車
母子の別れと旅立ちの図
菩提寺修学の図・講義
叡山入室の図
後白河法皇に御談義の図
道俗教化の図(立教開宗)
善導和尚来現を拝写せしむる図
阿弥陀三尊影現の図

お申込みは下記まで
発行=法然上人讃仰会

東京都港区芝公園4-7-4

明照会館内 〒105-0011

電話/03-3578-6947

FAX/03-3578-7036

振替/00180-8-82187

上の絵葉書は実物と多少異なります。

浄土

2002/11月号 目次

法然讃歌	成田有恒	2
お十夜法話	羽田恵三	10
念仏者としてのいのちを預かって	梶田真章	16
天台のお念仏	多田孝文	20
民話をたずねて	石崎敬子〈絵 石川忠夫〉	26
表紙の言葉	鈴木奈緒	33
饗流十方	袖山榮輝	34
食と健康	長田英樹	38
シリーズ詠唱群馬・大蓮寺		40
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	43
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	47
編集後記		48

表紙題字＝浄土門主 中村康隆
下アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎



法然上人鑽仰会主催、浄土宗総合研究所協賛公開講演

法然讃歌

生きるための

念仏

その一

大本山増上寺法王

成田有恒

(作家寺内大吉)

この増上寺に静寛院宮、和宮様のお墓がございます。どういふお方かというと、これは明治天皇のおばさんに当たるお方で、孝明天皇の妹さんです。これが第十四代徳川家茂將軍の奥さんになって江戸へ下ってこられる。ところが、家茂という人は若くして京都へ行っている間に亡くなってしまう。静寛院宮はすぐ髪の毛を下ろし、いわゆる尼さんになるのです。

ところが、よく調べると尼さんではないのです。剃髪したとは書いてありません。薙髪ちはつしたと書いてあります。髪を薙いだという。決して剃ったんじゃない。剃髪と薙髪というのはっきりと違ふのでありまして、昔の侍やその他御主人が亡くなるとみんな薙髪する。そして、五、六年たつてからまた再婚したりしています。薙髪というのは剃髪じゃないのです。

剃髪というのは僧尼令に基づいた八宗兼学、八宗を全部わきまえあらゆる行を積み上げた尼法師でありまして、これは剃髪しております。薙髪というのはまあ言ってみれば気持ちだけの尼さんみたいなものです。もつと言えば、女性の聖でございます。女聖でありまして、髪の毛をなでつけて髻むすを集めてすぼと切つただけだと辞書などには書いてございます。だから、侍の奥さんがすぐ薙髪した。また、和宮様も決してくりくり坊主のお像はどこにもない。ふさふさと髪の毛を残していらつしやいまして、薙髪でございます。

ということとは、薙髪をした尼、そしてまた、男聖である入道、こういうのが今申し上げてきた聖の男聖、女聖でありまして、これらがやはり法然上人の組織下にある。信仰だけを持ちながら、余り坊さんの格好にはとらわれない。そして、彼らは単なるお葬式だけではない、生きる上でもお念仏というものを実践してきた日本の大きな中核体と言えるので

ございましょう。

日本語という不思議

生きるといえば皆様方、別れを告げるとき日本人は「さようなら」といいますね。これも世界的な言葉になって「グッドバイ」、「さようなら」。あれはどういう意味なのでしょう。漢字で書くと、左という字に様、あと、なら。あれは武家言葉でありまして、「左様であるならば」、ということですよ。

ある人が親しい人のところに出かけていく。実はにつちもさつちもいかない、これだけの金をひとつ融通してくれないか。借金の申し込みに行くわけです。そうすると相手も、いや、まことに御同情にたえないが、おれの家も火の車なんだよ、ひとつ勘弁してくれないか。さようならいたし方がない、ではさようなら、というやつなのです。そういう意味なのであつて、あれは決して永遠のお別れだけじゃない。さようならばいたし方がない。この世の中には、さようならいたし方ない、という場合がうんとあるわけでございます。

日本の言葉というのは大体武家言葉のなごりが多いのです。皆さんがまず電話をかける「もしもし」と大抵の方は言います。「もしもし」、これはどういう意味ですか。実は「申し申す」なのです。物申すというやつです。だから皆さん、さてこれからしゃべりますよ、申し上げますよ、申す申すと言っている。これが民衆のやわらかい表現に変わつて「もしもし」になったのですね。だれがああしたのでしょう。多分これは明治になつてから歌ができた。「もしもしカメよ、カメさんよ」その辺からあれは唯の呼びかけになつたんじゃないかと思うのです。明治の最初というのは、そういうぶこつい侍言葉を民衆が使え

るような言葉に変えているのです。

また、外国からいろいろな言葉が入ってきます。例えば明治で最初の小学校、第一号はこの増上寺にできました。日本第一小学校というのです。ここの山内ではございません。ちょうど今の御成門の近くの源流院というお寺さん、ここが日本の小学校の第一号です。その後あちこちに六カ所ばかりできたのです。

小学校に入学すると、皆さんもそういう御経験があるように、ページを開くといろいろ絵がかいてありまして、私たちのときはもう大昔ですから、「ハナ、ハト、マメ、マス」、もう忘れてきましたね、「ミノ、カサ、カラカサ」、随分変な品物が並んでおりました。その後「サイタ サイタ サクラガサイタ」になったでしょうが。いずれにしてもそういう物品を並べていました。最初の小学校の教科書は物品を並べなきゃならなかったのです。

ところが、明治の文明開化でございます。外国語が盛んに入ってくるものだから、イロハの四十八文字だけじゃ足りない。「パピブペボ」、濁音、半濁音が入ってくる、そこで、お役所が教科書をつくるのに一番苦労したのが「ボ」なのです。パピブペボのボ、どんな物品の絵をかいたら良いのだろうか。何としても出てこない。現在ならポスターだとかポストだとか幾らでもありますが、みんな外国語ですからね。当時は日本の品物の中にボのつくものがないのです。

お役人はいつまでたっても教科書ができない。何かボはないかなと思って悩んでおりました。お休みの日に近所の野原を歩いていた。そうしたら、子供が二人ばかり犬を追っかけてる。「こらボチ、こらボチ」。ボチか。そこで、

「ちよっとお前らに聞くけど、あの犬の名前はボチっていうのかね」

「いや、あんな犬名前なんか無いよ、のら犬だよ。たださ、体にポチポチがあるじゃないか」
まだら。ポチポチ。はあ、ポチのポか。

役人は早速翌日、これは簡単だ、ポチポチのつけた犬を絵にかいて、ポチのポとやったわけです。そんな犬はどこでも見かけるから。二年とたたないうちにたちまちこれが広がって、ポチのポ、犬はポチの代名詞みたいになっちゃった。またらがあろうとなかろうと。数年後にできた花咲かじいさんの歌にまで「裏の畑でポチが鳴く」って、大昔の犬がポチになつてゐる。

まあ言葉というのはそのように民衆の間で広がっていった。電話のもしもし、また、「鳩ポッポ」。これなんかをつくった方も、本所の西光寺さんという浄土宗のお寺さんでございます。お寺さんが盛んにこういう童謡をつくった。

戦後はまた、音羽ゆりかご会の声のいいお嬢さん方、川田正子さんとか川田孝子さんとかたくさんの童謡歌手が出ました。この間も川田正子さんが増上寺へ来て一時間ばかり歌っていたんですが、その後でちよつとお話をした。

「あんたお幾つ？ 今でも童謡をそのままで歌ってる」

「六十三でございます」

「ああ、年を聞いて悪かったね。あんたの歌ってた歌に『ことし六十のおじいさん』という歌があつたっけね」

あのころは六十で本当のおじいさん、おばあさんでした。今は六十歳なんていったらおじいさん、おばあさんなんていう人はいないです。これからまだ十年、二十年。時代もそう変わってきているわけでございます。私なんかも本当に、ことし既に八十歳の声を聞き

ました。いやあ昔なら病院で寝たきりになつてゐる年齢なのに、このこまたこの大本山なんかへ出てきて務まるのかいな、などと思つておりましたが、やつてみればやれないことはないようです。

夢と肉体

いずれにいたしましても、お念仏というものは、南無阿弥陀仏と唱えることによって、法然上人もおつしやつてます。法然上人は亡くなつたのはちょうど八十歳。正月の二十五日に亡くなつたわけですが、その正月三日、お弟子さんが集まつた。近いうちに亡くなる亡くなると言つてゐる、それ本当のことですか。お弟子さんが聞くのです。「いつごろ亡くなるのですか」と。まあ厚かましいやつがいます。それに対して法然上人は「いとまう言葉、昔の言葉では。お伝記にそう書いてあります。それに対して法然上人は「いとまう」とお答えになつて、「決定なんてそんなややこしいこと言うなよ、極楽へ、お浄土へ必ずいける、そんなこと言うな、もともと私は極楽浄土から生まれてきたんだ、ただそこへ歸つて行くだけだ」。そうお答えになつたといひます。

これは八〇〇年後にも滅びない言葉でございます。私たちはお浄土から生まれてきてゐる。それは肉体は皆さんも御承知のように両親の子供として生まれてくるのですが、それは体、肉体の問題であつて、私たちの心というものは一体どこから来たのでございましょう。

皆さんも夜寝ると夢をこらんになると思ひます。私もいまだに見ております。寸暇を惜しんで見てゐるのじゃないかと思ふくらいです。なぜかという、三十分寝てもちゃんと夢見るからです。一体あの夢というのは何でしょう。いまだにわからない。要するに、脳

髓の中に有機化合物がふえてきて、脳髓を刺激して夢を見るのだそうです。だから、この人は今夢見てるということは臨床実験でわかるのだそうです。ただし、中身まではわからないのです。

しかも、またこの臨床実験で、この人は夢を見ていると、見ていない熟睡している、その選別の中で不思議な答えが出てくるのです。その学者さんによると、人間は年齢別で何歳ぐらいまでが一番夢を見るのかといいますと、多分私ら八十にもなるとほとんど睡眠時間の八十％ぐらいは夢見てるのじゃないかと思うのですが、しかし現実には全く逆なのです。年を取れば取るほど夢を見ている時間は短くなる。最もたくさん見ているのは〇歳から四歳までの乳幼児だそうです。

そういう結論を聞くと、はてな、と疑問を皆さん持つはずで、夢の中に出てくる世界、そんなに架空の世界は出てこないのです。大体我々が生きてるときに住んでる世界でしょう。経験にある程度基づいてる。〇歳から四歳の赤ちゃんがどんな経験があるのですか。どんな世界を知ってるのですか。知らないはずで、にもかかわらず夢を見ている。皆さんも私も実はその年齢を経過しているわけなのですが残念ながら全く覚えてない。

私の経験では、最初の夢だと記憶している夢は、広い草っ原を見おろす丘の上に自分が立って、何かしかいい気持ちだね、いい気持ちだね、ここで立ち小便したらもつといい気持ちだろう、というわけでシャーッと立ち小便をした記憶があります。見事なおねしょの洪水をつくっちゃったわけでございます。これが私の夢の発端でありました。もつと前にも見ているのでしやうがさっぱりわかりません。

日光の東照宮へいきますと眠り猫というのがあります。左甚五郎がつくった名作と言わ

れています。猫が鼻毛を伸ばして眠っている姿ながら、何でそれが名作なんでしょうか。これは猫の前世は人間であった。それも美女であった。ところが、残念ながら猫に生まれ変わってしまった。夢の中でその前世のことが出てくる。もてはやされた美女の生活であります。夢の中で楽しんでる。あれが眠り猫のテーマです。名作といわれているそうでございしますが、いずれにしても乳幼児の夢というのは大きなテーマなのであります。何を見ているのか。

八〇〇年昔の法然様は極楽お浄土から生まれてきたという教えを残されていますが、これもまたそういう幼児体験に基づくことでありましょうか、信仰の深まりによって出てきた考えでありましょうかと、思うようなことでございます。

眠り猫といえば日光の東照宮。これは御承知のように徳川家康公を祀っているわけです。大変な精緻を凝らした美術的な建物が東照宮であります。ところが、最初にできた東照宮はそんなに立派なものではなかったといえます。最初に精緻を凝らした御霊屋といえますと、これは増上寺にありました。二代將軍秀忠公のお霊屋です。これが精緻を凝らした世界の建築美術としても本場にトップを行くものでした。そして、これのミニチュア化したものを、英国の女王の、戦争前でありますが、お祝いに日本から贈ったわけで、これが今日でもロンドンの大学に保管されているわけであります。肝心の増上寺の方はB二九の空襲でこの御霊屋は全部焼けてなくなってしまうしました。二代將軍秀忠公のお霊屋がすばらしいために、日光の東照宮の家康公のをつくりかえた。だから東照宮の兄貴と言われているわけです。秀忠公のお霊屋の方がはるかにすぐれていたのです。

(続く)

お十夜法話

羽田恵三

日常の忙しい日暮しに追われていますと、つい忘れてしまいそうですが、もう野山はすっかり色づき、大自然はいっせいに結実のときを迎えています。

「この秋は、雨か風かは知らねども

今日のつとめに、田草取るなり」

（二宮尊徳）

農家の方々が、秋の収穫をめざして苦勞下さるその努力は大変なものでありますが、収穫のほとんどの力は、天地大自然の営みであります。そのまことに不思議としか言いようのない働きが、厳然とこの天地大自然の中に働いていて下さるのであります。目に見えるものではないけれども、目に見える相として現していただく。この事を私たち人間はどう頂けば良いのでしょうか。ただ合掌と手を合わす以外には有りません。

この結実の好季を選んで、浄土宗の寺々では「お十夜法要」が勤められます。今年の収穫に感謝すると同時に、すべてが実を結ぶ自

然の姿を眺めながら、すべて一切の衆生を「救わずにはおかん！」とお誓い下さった、阿弥陀様の本願の成就した事をわが身に感じ、お喜び申し上げる法要であります。

浄土宗の宗歌ともなっていますが、法然上人のお和歌に、

「月影の、至らぬ里はなけれども

眺むる人の 心にぞすむ」

と、お念仏信仰のあり方、阿弥陀様のご本願の頂き方を、わかりやすくお示しくださっております。

これは『観無量寿經』の中、「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」の文を解釈なさったもので、み仏様のお育ての力と、救いの力を明かにされたものであります。

月影の、影とは光のことでございます。光には色光（物質の光）と心光（心の光）の二種が有りますが、仏教にいうほとんどの光は「心光」をさします。その「心光」にまた「常光」と「神通光」があります。

「常光」とはみ仏が常平生に照らす光で、この和歌の「月影のいたらぬ里はなけれども」にあたり、「神通光」はみ仏が特別な時に照らされる光で、阿弥陀様の「神通光」は「撰取不捨」の光明で、お念仏申す人がある時は照らし、ない時は照らさないというこの和歌の「眺むる人の心にぞすむ」にあたります。

み仏のみ光を月の光にたとえ、月の光はすべてのをくまなく照らし分け隔てするようなことは有りません。「月影の至らぬ里はなけれども」であります。天上の月は皓皓と照らしていて下さっても、家の中には気づきません。たとえ外にいて月の光を浴びながらも、他の事を考えたり、他の事に気を取られていてはこれに気づくことは有りません。「今晚のお月様のなんとみことな事」と、よろこぶことのできるお方はどんなお方でしょう。それは外に出て天上のお月様を振り仰いだお方、つまり「眺むる人」であります。「念仏の衆生」お念仏申すお方にしてはじめ

て、「救わずにはおかん！」とお誓い下さった阿弥陀様のご本願のご利益、お救いにあずかれることをお示し下さっているのではありません。お和歌の最後「心にぞすむ」の「すむ」二文字の中にお念仏で救われていく尊い大利益が説き納められています。

まずひとつには「住む」「棲む」であります。つまり私たち凡夫の暗闇の心（無明）にすんでくださる。大自然のお育て、御恵みの中に生かされているにもかかわらず、当たり前な事と感謝も無くうち過ごしている愚かな私でも、み仏の願いに応えて「南無阿弥陀仏」とお念仏申したならば、阿弥陀様は直ちに神通光で照らして下さい、その声に応えて凡夫のわが身に添いまして、共暮らしをしてくださる。同時に私の有るべき姿に気づかせてください。なんと尊く有難いことではありませんか。

つぎに「澄む」「清む」であります。私たち凡夫の日常生活は如何でしょうか、恥ずか

しながら自分中心、言葉で態度でごまかしてはいても本質的なところは自己中心でありま
す。それは学問でも、修養でもどうにもでき
ない煩惱を抱えているからであります。「貪
瞋痴」三毒の煩惱と言われ、中でも中心は道
理に暗いと言われる愚痴（無明）であります。
それゆえにさまざまな罪を重ね、苦しみ迷い
の日暮しに明け暮れてまいりました。そんな
私がお念仏を申しますと、煩惱の闇を清らか
に「澄む」「清む」清ませて下さるのであり
ます。「その光に遇うものは三垢（貪瞋痴）
消滅し、身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ず」
と、『無量寿經』にもはつきりと示されてい
ます。

三つには「済む」であります。

私たち人間にとつて最大の難関はなんであ
りましょうか。それは「死」でありましょう。
病氣や、生活苦も辛く苦しいことではありま
すが、それはその延長線上に「死」があるか
らであります。「命に別状ありません」と言

われた病氣ならそれほど案ずることはありません。

人生最大難関は「死」であります。それが
「眺むる人」となつて、お念仏申すお方とな
つたなら、この世に日暮しする間は阿弥陀様
との共暮らし、喜びも悲しみも共に味わつて
くださると思えば喜びは倍増、病氣の苦しみ
は半減致します。そして一大難関訪れたとき
には、阿弥陀様が、勿体無くも臨終の枕辺に
来たり賜い、極楽浄土へ迎え取つて下さるの
であります。法然上人のお言葉に「念仏すれ
ば、臨終に仏来迎すということを一念も疑わ
ぬ方を深心とは申すなり」とお示しでありま
す。ここに人生の一大事、この世は仏と共暮
らし、後の世は弥陀の極楽へと、この世、後
の世の大問題が、念仏の衆生となつてきつぱ
りと解決「済み」となるのであります。

「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へ
参りなん、とてもかくてもこの身には、思い
わずらう事ぞなきと思ひぬれば、死生ともに

わずらいなし」と仰せられた法然上人のお言葉がしみじみと味わえて参ります。

「月影の至らぬ里はなけれど」天地大自然の営みとなつて、気づこうが気づくまいが一切衆生を我が子の如く育ててくださるみ仏様の御ちから、そのすべては、この愚かな私に心の目を開けとの呼び声であつたと受け取らずにはおれないのであります。

「鳴く鳥も、岸打つ波も松風も

我を頼めの弥陀の呼び声」

み仏は、尊き親心で恒に愚かなこの私の無明の心を照らし、天地自然の営みとなつて声なき声で呼び掛けていて下さつた。ここに気づくか気づかぬかが大きな分かれ道となる事でしょう。

何年前になりましたようか、島根医科大学で日本ではじめての生体肝移植手術が行われました。杉本裕也ちゃんという赤ん坊がお父さんの肝臓を頂かれた。あの時にある方が仰つた。「もし自分の子がそんな状態になつたと

き、自分の肝臓を分けて上げる事が出来るだろうか」。私たちは大人ですから、ついお父さんの立場で考えてしまいますが、これはそうでなく、赤ん坊の立場で頂いてみるべきだと思ひます。

お医者様も手を尽くされ、周りの方も成功を願われた。また赤ん坊も何度も危機を乗り越えて頑張りましたが、結局は残念ながら二百数十日の命でした。しかしあの手術が成功していたとしたらどうでしょう。手術を受けたのは一歳の赤ん坊、ことの次第は何にもわからなかつたでしょう。でもやがて十五、二十歳になつた時、この事実を知る日がきたでしょう。「自分は覚えてはいないけど、私が赤ん坊の時、お父さんが痛い目をして大切な肝臓を分けて下さらなかつたら、とても今日まで生きてくる事は出来なかつたんだ」と、いう事に気づいた時、この裕也ちゃんの物の考え方、生き方が大きく変わったと思ひます。ここに気づくか否かが大きな分かれ道であり

ましよう。

世の善惡の基準は、人の都合で変化があります。しかし子供が親の願いに気づき、その願いに応える事、これは大きな善でありましよう。阿弥陀親様は、子供の私どもに願われた事はただひとつ、「我が名を呼べ！称我名号」その願いに応え、お念仏申すことが何にも勝る大善根と、お釈迦さまはお経に説いておられます。

「此に於いて善を修する事十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善を為すこと千歳するに勝れたり」(『無量寿経』)

少善も積めない私たちは、自然の営み、收穫に感謝し、阿弥陀様の本願成就を喜びお念仏に励ませて頂きたいものであります。



野田真章

念仏者

としての

いのち

を預かって



法然院二十五菩薩の散華
(撮影/小堀祐二 提供/浄土宗出版室)

梶田真章

法然院住職

私がお預かりしております法然院は、京都の市街地の東側に連なる東山三十六峰の一峰である善氣山を境内とし、市街地に近い場所でありながら様々ないのちの営みが繰り広げられております。境内の森は、椎などの照葉樹を中心として杉や樟、榎、椿などの大木も点在し、夜にはムササビが木々の間を飛び交い、イノシシが伽藍の傍まで顔を出します。様々な鳥たちのさえずりも年中聞こえ、狸、狐、リス、テンなどの動物も観察されています。また、梅雨には池の上に張り出した木々の枝にモリアオガエルの産卵が見られます。当院を訪れる方々は、このような豊かないのちの営みと伽藍の配置の妙が織りなす境内の風致を賛えて下さいますが、それはまさしく森によって支えられているのです。

十三世紀の初めに法然上人と弟子の安樂・住蓮が庵を結ばれた地に、一六八〇年に知恩院第三十八世萬無和尚と弟子の忍濃和尚によって本堂が建てられたのが現在に連なる法然

院の歴史の始まりです。法然上人の遺跡復興と僧侶の育成を掲げて出発した当院は、当初は僧侶のための修行寺院としての性格が強かったのですが、現在では檀家から浄財をお納めいただき、檀信徒各家の葬式や先祖供養を行うことによって伽藍の維持運営をはかるという檀那寺としての役割が基本的な性格です。しかし同時に、八百年前に説かれた教えが現在でも多くの人々の心に共感を与えることができる法然上人ゆかりの寺として全国から参拝者の方々がおり、また近年、観光地として多くの人々が訪れるようになった「哲学の道」の東側にあるため、境内を散策される観光客の数も次第に増え、また、毎朝きまつて参拝に来られたり、境内で体操をされるご近所の方々もおられるなど、現在の法然院は、それぞれの目的を持って寺を訪れられる方々に様々な役割を果たしております。

哲学者でもあった先代住職、橋本峰雄（実父。私は母方の姓を継いでおります。）は、

元は浴室で長らく物置きになっていた建物の内部改装を一九七七年に行なって講堂と名付け、ここを会場に「現代風俗研究会」が開かれておりました。当院のあり方に一般の市民の方々の出会いの場という新たな役割を付け加えようとする試みだったと思います。「寺は開かれた共同体でなくてはならない。」というのが先代住職の考えでしたが、一九八四年三月に五十九歳で往生いたしました。私は、先代の遺志を継ぐ意味でも当院の恵まれた自然環境を生かして現代社会の要請にも応えられる何か新たな活動ができないかと考え、近所にお住まいの自然観察指導員の方との出会いによって、一九八五年十一月に「法然院森の教室」をスタートさせました。身近な自然破壊や地球規模の環境危機に鑑み、豊かないのちの営みとのふれあいや生物についての知識を吸収することを通じて、人間の望ましい生き方を探ることを主たる目的とするものですが、寺を地域社会における一つの核として

人と人との出会いの場を提供することそのものが寺の一つの役割であると思っております。「法然院森の教室」の活動を発展させる形で一九九三年には環境学習活動の拠点施設として境内に建物を新築し、『共生き堂（ともいきどう）』『通称は法然院森のセンター』と名付け、活動の幅はさらに広がりました。二〇〇一年三月にはクリーンエネルギーの普及を目指す市民グループとの連携により、この建物の屋根に太陽光発電パネルを設置し、クリーンエネルギーの学習にも力を注いでゆきたく思っております。

「法然院森の教室」という看板となる活動を始め、私自身も環境問題を考える多くの市民グループに積極的に参加した結果、次第に自然科学者やアーティストとのおつきあいも増え、自然な形で寺を個展、コンサート、シンポジウム、フォーラムの会場として提供する機会が増えてゆきました。現在では佛教行事や先祖供養のための儀式以外に年間百以上

の催しが寺を舞台に繰り広げられております。インド、タイ、モンゴル、韓国、中国、イギリス、スペイン、アメリカ、イタリア、ベルギー、ブラジルなど様々な国々の方々にも芸術発表の機会を提供し、国際交流にも少しお役に立てているようです。

現代における寺には、いわゆる宗教活動の場としてだけでなく、社会的役割を離れた個人の出会いの場、アーティストを育む空間、地域活動の拠点など、様々な役割を果たしてゆく可能性があります。一分、一秒に追われる現代社会、お釈迦さまが説かれる縁起の道理に支えられた大いなるいのちの営みの中で、本来、全ての生き物には等しくゆつたりとした時間が流れていることを再認識して日常に戻っていただくのが寺の存在価値であると思います。当院に集われる皆様方が、普段とは違う自分を再発見していただいたり、〇会社の社員としてばかりではなく、一つのいのちとして他のいのちとのかかわり方を見

つめ直していただける場を提供できれば、例えば参詣者にお念仏を唱えていただかなくても、佛教寺院としての役割は果たしていけるのではないかと存じます。

観光という言葉は、単なる見物とは違い「光を観る」という意味です。光とは風土のこと、風土は地域ごとに人間を含む様々な生き物によって培われてきたものですから、真の観光とは、現在の景観が現れるにいたる縁となったいのちの営みに対する想像力を、訪れた場所ごとに働かせることではないかと思えます。豊かないのちの営みに溢れている法然院を真の観光寺院としてゆくためには住職は何を大切に考えてゆけばよいのか、を問い続けながら、生きとし生けるものは阿彌陀佛の光明のもと、平等なるいのちを預かっているのだということを活動を通じてお伝えしてゆければと願っております。

天台

天台宗のお念仏

横浜・大聖院

多田孝文

各宗派のお念仏

天台宗の教えと行

天台宗は伝教大師（767～822）が、すぐれた大乘仏教の真髄を集めて、開かれた宗門である。天台宗の法門は五宗といって、法華の教え・坐禅止観の行・菩薩として生活の軌範である円頓戒・念仏の法門、そして真言密教の法門、これらを兼ねて行ずる宗門である。この五法門は、どの教えも釈迦の本心に叶った大乘仏教の根本的な教えである。大別すれば前の四は顕教（明らかに説かれた教え）、後の一は密教（真意を隠して説かれた教え）といえる。天台宗における顕教の日常修行の中心となるものは、中国の天台大師智顗（538～597）が、法華の教えを実践する方法として説かれた『摩訶止観』に示された四種三昧である。

一、常坐三昧、止観坐禅によって身心を安定、一切の因果の道理を観ずる法。

二、常行三昧、常に行道し心に弥陀を念じ、

各号を唱え安心を得る法。

三、半行半坐三昧、自らの衆罪を懺悔して兼ねて坐禅止観し仏心を成ずる法。

四、非行非坐三昧、期日や方法を定めずして、日常生活を営みながら、念仏・観法により仏の境地に入る方法。

以上の四種が心の安定を得る方法である。この四種の行法は、いずれも同格で、修法は懺悔が基本である。衆罪を悔い改めることにより、身心の清浄を開発し、現世において仏心を成ずる課程に入るのであるから、天台宗では、これらの行法は欠くことのできないものであり、常に修習することを規定している。

一般に「朝題目、夕念仏」といわれる朝題目は、法華懺法（半行半坐三昧）、夕念仏は、例時作法（常行三昧）に当り、朝は法華を誦し、夕は念仏するのである。そして、この二種は出家・在家を問わず、通常の法要としても営むことが多いのである。そこで、法華と念仏の関係を、天台宗では、法華は南無阿

天台

弥陀仏の六字を広説したものであることから大念仏といい、念仏は法華を六字に縮めたものであるから小法華と口伝している。すなわち法華の教理は弥陀の悟り、弥陀の慈悲は法華の顕れであるといわれるのである。

天台宗における浄土念仏の法門

さて、天台宗における浄土念仏の法門は、まず、伝教大師が入唐して(804~805)前述の常行三昧を伝えられた。常行三昧は『般舟三昧經』によるもので、仏立三昧ともいう。修行中に十方の諸仏が現前するのを見ることができるといところから、この名称

が与えられたのである。道場を嚴飾し、阿弥陀仏の像を本尊として安置し、九十日間、歩々、声々、念々ひとえに弥陀を離れざらしめる行である。身業としては弥陀を行施し、口に弥陀を唱え、意に弥陀を念じて不断ならしめよという思想は、後代の中国・日本の浄土教に影響をおよぼしたといわれる。いまでも比叡山西塔にある常行三昧堂では、これを継承し如法に行じられている。

また、後に慈覚大師は、最後の遣唐使の一員として中国に渡った時(838~847)、山西省の五台山、大聖竹林寺で念仏の法門である「例時の作法」を得て、当時そのままの

唐代の漢音・音律をそえて伝えられた。帰朝後、これを日本に弘めたのが日本における念仏の教えの最初であるといわれている。

「例時の作法」とは、日々夕刻に阿弥陀仏を念じて極楽国をしたう修行の作法である。この作法では、懺悔・念仏によって、自己の心の中に存在する阿弥陀仏を観念して、現世において理想の浄土を実現しようとすると同時に、過去精霊の追善供養としても営まれる。仏教において、懺悔による自己の清浄心は、仏の心と一体不二であることから、例時作法は、念仏によって自己の心の中にある仏性を顕発する行法であるともいえる。これを伝え比叡山に常行三昧堂を建て、この法によって念仏を修さしめたのである。それ以後、全国いたるところにこの作法が行われるようになったのである。

法然上人が「阿弥陀経はそれ沙汰なれども、自然に流布して、処々の道場にみな例時とて、毎日かならず、阿弥陀経を読み、一切の諸僧、

阿弥陀経をよまずと云う事なし。これ偏に、浄土教有縁のいたす所なり。ことのをこりを尋ぬれば、叡山の常行堂より出たり、彼常行堂の念仏は、慈覚大師渡唐の時、将来し給へる勤行なり。」（法然上人行状画図二十四）と仰せられたのは、この事をいっただのである。

天台宗では、「法華懺法」とならんでこの「例時作法」を葬儀や年忌法要、十夜法要などで、現代でも伝承当時のままにこれを修している。

天台宗の法要とお念仏

もちろん天台宗は、五宗兼学の宗門であるから、各種法要では、経も読み、題目、念仏、真言も唱えるが、お念仏を「光明遍照」（観經文）や恵心僧都の「横川法語」の後に唱えるのはもちろんである。また、近年は、ご詠歌がさかんであり、天台宗の「念仏のご和讃」を全員で唱える寺院も増えている。

一般の檀信徒のご家庭でも、「朝題目、夕

天台

念仏」のおつとめをしている。また現在でも地域社会には、二、三の念仏講が組織されている。「庚申待ち」などと習合したものもある。一つの念仏講は、通常は月毎に講中の各家を回り、百万遍の念仏を修している。講の箱には、大きな念珠と打がねと十三仏の掛軸が納められており、百万遍を数えるそろばん状の札が付してある。

講中の構成は、先達をはじめとする天台・浄土宗の方々である。そこでの雰囲気は真面目で、なごやかなコミュニケーションの場ともなっている。定期の講のほかには、施主の要請に応じて通夜、葬儀、年忌法要の祈りに、

仏前にて、念仏を唱え供養することもある。年忌などによつては十三仏名を唱える場合もある。また、講ごとに音律の相違があり、その成り立ちなどには興味深いものもある。

天台宗のお念仏の意味

普通、浄土信仰というのは、阿弥陀仏に依して、死後、その仏国土である極楽浄土に生まれかわるということを願う信仰をいうようである。天台では、『阿弥陀経』を読み念仏し、極楽を観察し、自分の心の中にもともと具わっている弥陀をよびおこし進んでその弥陀の浄土をこの現実の世界に実現しようと

し自分を完成させる、というものである。

それは、教理の上で、そのように定めているというのではなく、清らかな自分の心を土台にして、自分をとりまくすべてのものに積極的に働きかける行為を伴って完成へと向うことである。

むしろかしくいえば、これらのことを、本性の弥陀、唯心の浄土、などと呼んでいるが、『法華経』で菩薩は仏の国土を浄め、衆生を成就するものである、と説かれていることがその根本的立場である。

『維摩経』の仏国品では、衆生の類、これ菩薩の仏土なり、と教えている。いうなれば衆生の心の内に仏土があるといい、菩薩は人間の心の内に仏国を見るのである。人の心の中に仏国を見るためには、仏は、直心、深心、菩提心の三心を説いて、そこに仏国を見るのであると示している。直心とは、清らかな、

素直な心。深心とは、善き行いを心の底から願うこと。菩提心とは、大悲心である。

『観無量寿経』では、仏は法界を身として、一切衆生の心想の中に入っておられ、仏国土は衆生の心想より生ず、と説いている。これは『法華経』や『維摩経』の説と通ずるものである。

これらの教えから、仏と衆生が一体であるという真理を理解して、名号を唱えるのが、天台のお念仏である。この道理に安心して念仏すれば、次第に弥陀と自分との隔てがなくなり、心中に明らかに弥陀の光明を感じ受け、堅い信心が生ずるのである。同時に弥陀の慈悲に摂取されている確信を得れば、物事に恐れず、現世のすべての行為は、未来の果報であり、社会救済の菩薩行である。これが、天台の浄土の教えの基本的な考え方である。

民話

をたずねて

連載

猫檀家

石崎敬子



ISHI
KAWA

絵・石川忠夫

むかし、あつたそうな。

あるところに、大門寺というたいそう貧乏な寺があつたそうな。その寺には、年を取った和尚さまと寺男の爺さまがおつて、二十年ばかり前からトラという名の猫を飼つておつたそうな。

ある日のこと、和尚さまは山の村へ法事に行つたそうな。その帰り、夕方になつて山道を歩いておると、道ばたの藪の向こうから声がする。

「大門寺がおらん、大門寺はどこや」

「わしを探しておるのは、誰じやろう」

不思議に思つた和尚さまが、藪の中をそつと覗いてみると、どうじやろう、そこにはなん十匹ものネコが寄り集まつておる。

「大門寺が来んと、やっぱりうまくいかん」

どうやら猫たちは輪になつて踊りの稽古をしておつたようで、ちよこつと踊つては、それは違つと、口々に騒ぎたてておる。

そのうち、肩に豆絞りの手ぬぐいをかけたトラが、息を切らせて飛んできたそうな。

「すまん、すまん」

「大門寺、遅かったな。どうした」

「いやあ今夜は、爺さまが粥を炊いてくれたが、その粥が熱うて熱うてな、食うのにえらく手間どってな」

大門寺のトラは、そう言うのと、さっそく踊りの輪の中へ入り、猫たちに、そりやそりやと踊りを教えはじめたそうな。

「猫は年を取ると踊るといいうが、ほんにその通りや」

和尚さまは独りつぶやき、そつとその場を離れたそうな。そうして、寺に帰って寺男の爺さまに聞いてみた。

「今夜はお粥か」

「はい、米が足らるので、粥を炊きました」

「トラにも、お粥を食わしたか。熱がつておったか」

「はい」

「そうか。どれ、わしも粥を食べるとするか」

和尚様は何事もなかったように粥を食べ終え、囲炉裏端で白湯をすすつておると、トラがニャオーンと鳴きながら戻ってきたそうな。和尚さまの膝の上にひよいと飛び乗ると、トラは身体をすり寄せ、いつになくゴロゴロと喉を鳴らしておったそうな。

その真夜中のこと、和尚さまを起こすもんがおる。

「和尚さま、和尚さま」

はてさてと、和尚さまが眠たい目をこすりこすり起きあがつてみると、枕許にトラがちよこんと座っておる。

「和尚さま、夕方はとんだところを見られてしもうた。これ以上はこの寺にはおられんが、二十年も世話してもらった恩返しに、お寺の檀家を千軒増やすからな。明日、隣村の長者の家で葬式があるけん、何があつても逃げんと、和尚さまはお経を唱えて下さいよ」

トラはそれだけ言つと、何度も振り返りなごり惜しそうに寺から出ていったそう。

次の日、トラが言つた通り、隣村の長者の家で葬式があつたそう。長者はあちらこちらの寺から、大勢の坊様を呼んだそう。大門寺の和尚さまも呼ばれ、隅っこでお経を唱えておつたそう。有難いお経が村中に響き渡るほどの賑やかな葬式になつたそう。

さて、いよいよ出棺となり、坊様たちがお棺を取り囲み、そのあとさきには、長者の家の者や村人達が列を作つたそう。長い葬式の列が、間もなくお墓へ着くという時、今まできれいに晴れあがつ



ておった空が、にわかに真つ黒な雲でおおわれ、強い風が吹くやら大粒の雨が降るやらで、大嵐になったそうなの。

「これは、なんとしたことやっ」

わあわあとみなが騒いでおると、ひとかたまりの黒雲が降りてきて、お棺を包み込むと、みな頭の頭の上高く持ち上げたそうなの。

「ば、化けもんだあ」

蜘蛛の子を散らすように長者や村人達が逃げ出すと、お棺を取り囲んでおった坊さま達も、お経を唱えるところではない。数珠をとり落とす者、腰を抜かして動けなくなる者、泣き出す者まで出る始末。大門寺の和尚さまもガタガタと震えておったが、昨夜のトラの言葉を思い出し、逃げ出したい思いをこらえお経を唱え始めたそうなの。

「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

声を限りに唱え続けておると、そのうちお棺がすーっと降りてきたそうなの。雨風も嘘のようにぴたりとおさまり、また青空が見えてきたそうなの。長者や村人達が恐る恐る戻ってきてみると、大門寺の

鈴木奈緒

デビュー作 1987年 小説家デビュー
1992年 小説家デビュー
1995年 小説家デビュー
1998年 小説家デビュー
2001年 小説家デビュー
2004年 小説家デビュー
2007年 小説家デビュー

和尚さま一人が、お棺の前でひたすらお経を唱えておる。

「おお、助かった。お棺も無事だ」

そのあとは何事もなく、無事に葬式は終わったそうなの。

「大門寺の和尚さまが、こんなにお偉いお方とは知らなんだ」

長者はたいそう感心して、大門寺の檀家になることを申し出たそうなの。その事があつちの村こつちの村で評判になり、我も我もと競つて檀家になったそうなの。おかげで、たちまち檀家が千軒に増えて、和尚さまも、寺男の爺さまも安楽に暮らしたそうなの。

これで、おしまい。

11

月

◆表紙の言葉◆

能素描

天鼓

てんこ

この能は中国、秋の阿房官と呂水畔^{うすい}で、時代は後漢、作は世阿弥、と伝えられる。

王伯、王母という夫婦があり、天から鼓が降る夢を見て生まれた子を天鼓と名付けた。その後天から本当の鼓が降ってきて、天鼓がその鼓を打つと素晴らしい音がした。それをきいた皇帝は鼓を所望するが、天鼓は命令に従わず山にかくれたので、捕えられて呂水に沈められてしまう。しかし皇帝が手にしたその鼓は、誰が打っても鳴らなかった。

勅使が天鼓の父、王伯のもとにつかわされ鼓を打つように命じられる。

愛児を失って悲しみに沈む父は、死を覚悟して参内し鼓を打つと、美しく澄んだ音を発した。皇帝もその哀れに心を打たれ、老父には数々の宝を与え、天鼓の霊を管絃講で弔うことを命ずる。

天鼓の霊は法事を喜んで姿を現し、再び鼓を奏する嬉しさに喜々として打ち鳴らし、楽を舞い興ずる。爽やかで一途な少年の心。

やがて夜も明けてくると消えていった。

表紙画と文

鈴木奈緒

プロフィール	1947年	三岸節子先生に師事
	1950年	女流画家協会展 H 婦人賞受賞
	1983年	秋耕会展 女流会長賞受賞
	1994年	秋耕会展 文部大臣賞受賞
		個展23回開催

舍利弗よ、かの仏の国土には、微風吹いて、諸もろの宝行樹、宝羅網を動かして、微妙の音を出だせり。

『阿弥陀經』

舍利弗よ、阿弥陀仏の極樂世界では心地よい風が吹き、さまざまの宝石を散りばめた並木の木々や、編み目ごとに鈴のついた天空を飾る宝石のベールを揺れ動かして、心地よい調べが流れている。

極樂の調べ

朝食を囲むテーブルにラジオの音が流れてくる。毎朝の光景だけれども、その日は平井堅の「大きな古時計」が聞こえてきた。朝食を終えた一年生の長男がランドセルを背負いながら「おおきなつぼのふるとけい おじいさんのとけいー♪」と口ずさむ。五年生の次女もやはり「おおきな…」と歌いながら学校に行った。

二人ともおしゃべりしながら食事を摂っていたのだから、ラジオの曲など聞き流していたはずなのに、それでも無意識に口ずさむということはどこか体の中に残るものがあるのだろう。

もう二〇年も前になるが、高校三年生の秋、祖父が亡くなった。一月ほど後、兄の友達が遊びに来た。ギターの名手の彼はビール片手に「何か弾くかい」と兄のギターを手に取った。兄は「大きな古時計」を弾いてくれといった。あぐらをかきながら彼と兄とぼくは、いつの間にか上半身を揺れ動かしながらこの歌を歌っていた。体を揺らすたびに祖父の思い出が体の奥底に染み込んでいく。そんな感覚がしたのを今も覚えている。

一八七〇年代のアメリカ童謡が今なお歌い継がれているのは、歌詞の内

容もさることながら、ゆったり体を揺らしたくなるような大らかなリズムに私たちの身心が休らいでいくからだろう。

身心が安らぐ大らかなリズム。そのリズムの源を描き出そうとした映画に「フェノミナン」がある。主演はジョン・トラボルタ。一九九六年の米映画だ。もてない万年青年が離婚経験のある二児の母親に恋をするが、恋の成就とともに不治の病魔に冒されていくという物語のクライマックスにこんな場面が出てくる。

死期を悟った主人公に「怖くないの？ 何か望みは？」と彼女が尋ねる。すると主人公は「赤ん坊がぐずって寝ない時、君はどういうふうにした？」と聞き返す。彼女がその胸に赤ん坊を抱きかかえるまねをし、体を前後左右に揺らしはじめると、彼は「そうやってほしい」と望みを告げる。次の場面、主人公は彼女の腕の中で「とても休らいだ気分だ。これでお別れだ」といって静かに息を引き取る。

母の胸に抱かれた赤ちゃんが安心して眠られるように体を揺らす。そうしたリズムのなかに、生死をも越えた身心の安らぎがあると描くわけだが、

じつはこの映画、冒頭からエンディングに至るまで、木々がゆったりと風に揺れ動く場面が随所に盛り込まれている。赤ちゃんを抱くリズムも木々が風に揺れるリズムも、それらは本来、大自然が備えているリズムである。そしてそのリズムに私たちが身心の安らぎを感じるのは、人も自然も森羅万象は一つに結ばれているから。この映画はそう訴えているのだ。「大きな古時計」もきつとそうした大自然のリズムに波長が合っているのだろう。極楽には心地よい風が吹いているという。その風が木々を揺れ動かし、天空のベールに結びつけられた鈴を鳴らして、心地よい調べを奏でている。そのリズムのことまで経典は説いていないけれども、極楽は身心の安らぐところだ。極楽の大自然が生み出すリズムも、きつと母の胸に抱かれ揺られていたような、ゆったりとした大らかなものに違いない。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

健康に人生を送る

十力条・長田流

5、肉食は高級なものを月一回程度(肥育・飼育段階での薬害)

昨今、社会をさがせているBSE(狂牛病)によって、食肉業界が大打撃をうけておりますが、わたしの目には「神様が牛を使って人間に警告を発している」と映ります。それは人間は人間としての食べものを食しなさいという警告です。

わが国では昭和四〇年代に入ってから飽食の時代に突入し、どの家庭でも肉食が多くなりました。栄養をとることによって健康になれるという考え方が根底にあり、食肉が栄養食の代表的存在として喧伝されつづけたからです。



数年前出会った「今食が危ない」(学研刊)とい

う雑誌には、現代の畜産では餌に抗生物質を混入して病気を予防し、ホルモン剤を投与することによってやわらかい肉を早く出荷できる、とあり「アメリカやオーストラリアでは日本向けの輸出牛肥育にホルモン剤を投与している」と説明して、牛の尻部に太い注射をしている写真を見たときのショックを忘れられません。生産農家にとって薬剤さまでし

ようが消費者は大迷惑です。

国内産鶏肉のばあいでも、かつては六〇日〜七〇日に出荷していたブロイラーが、早いもので二〇〜三〇日に出荷できるようになったと聞きました。こ

れにもホルモン剤が貢献しているということです。昨今、スーパーなどの食肉売り場をのぞいてみると鶏肉の安値におどろきます。それらが薬品まみれでないことを祈るばかりです。

ときどき見聞するマスコミのアンケートでは、現代の若者がもっとも好むのが「鳥の唐揚げ」です。わたしの幼少時代には夢であつた食肉を、現代では毎食、腹いっぱい食べられるわが国です。そこに健康を害する落とし穴があることを自覚してほしいのです。

肉食が飽食の象徴となつた昭和四〇年代から日本にはガンが激増してきました。さらに昨今は女性の初潮が早まっているという情報におどろいています。かつては中一から二年だったのが、現代では「生理の処置法を教えるのに小学四年生では遅いかも知れない」と小学校教師が語る時代です。前出の本には「小学校一年生に初潮があつた。この現象を招いたのはホルモン剤」と断じていました。わたしは小学校一年生が子供を生む時代になるのかと恐ろしい空想を抱き身震いしたものです。

「肉を食べるなら五倍の野菜を」と高名な食生態学者の講演を聞いたのが平成二年でした。そのとき「これから大腸ガン、直腸ガン激増する」と、現代の日本人が肉の量に比して野菜を食べない風潮を指摘していました。その説が真実かどうかを興味深くみてきましたところ、そのとおり腸ガンが、ガンの王者になつてきたのです。

また「肉を多く食べつづけると性格が肉食動物のようになる」という説がありますが、凶悪犯罪が頻発する現代社会を肉食がつくり出しているようにも思えます。

動物の食性を肉食、雑食、草食（菜食）に分類したとき人間は雑食ですが、日本人は腸の長さから判断して草食寄りというのが通説です。わたしはもっぱら菜食です。もちろん肉も嫌いではありませんので、月一〜二回程度、EMを混入するなど餌にこだわって育てられた高級肉を、スキヤキか豚カツ、肉じゃが、酢豚に調理して、たっぶりの野菜を友だちにして食べています。

大蓮寺詠唱会

大蓮寺で詠唱を始めたのは昭和五十七年三月でした。その頃、教化センター内で教区長、教化団長をはじめとして、吉水流詠唱を推進する気運が盛り上がり、当時、教区長であった先代の大蓮寺住職が、私に「詠唱をやってみないか」と切り出したのが、きっかけとなりました。

初めて聞く詠唱という言葉にいささかの心配を持ちながら、鎌倉光明寺での一拍二日の講習に参加したのが大蓮寺の詠唱の始まりとなりました。

お寺で何か活動したい。お念仏がいいか？ 写経会がいいか？ あるいは子供会にしようか？ 色々と迷っていた頃で、何かやらなければお寺が死んでしまう。大げさのようですが、そう考えていた頃です。

ちょうど浄土宗青年会や寺庭婦人会も、めざましい活動を展開し始めていました。開宗八百年も過ぎ、善

平成14年度の詠唱新年会本堂にて。



群馬教区前橋組

大蓮寺

導忌や生誕八百五十年も相次ぐ中で、法然上人を身近に感じ、その教えを何かの形で檀信徒に伝えねばと考えていた矢先に詠唱の話が持ち上がったのです。

そうした中、教区長、教化団長は早速、センター主催で詠唱を取り入れ、桐生の浄運寺において、群馬初の講習検定が行われたのです。寺庭婦人の皆さんが中心でしたが、相当の受講者が近隣地区からも集まり、教区内に詠唱の気運が一気に芽生えました。

私は早速自坊に帰り、総代さんと世話人さんに集まってもらい、この事を話しました。そして、この寺にもご詠歌や和讃を唱える会を作りたいので、皆さんも一緒に始めませんか、とお願ひしたのです。すると、「うちのかあちゃんに話してみんべえ」、「担当の檀信徒に声をかけてみましょう」、「自分も一緒にやってみんべえ」などと声をかけあつて、二十五名ほどの会員を集めることができました。

何の会でも苦楽はつきもの。苦しいことは覚悟してかからねば何もできません。しかし私は詠唱自体は苦しいと思っていませんから、月二回の詠唱の日が楽しみでなりませんでした。なぜ楽しかったのか、こんな理由があつたからです。

大本山増上寺御忌詠唱奉納大会に参加して。



一 まず会員の皆さんに会える喜び。

一 法然上人のお歌を通して上人に会えるような嬉しい心地になれること。

一 そして、皆さんと一緒にお念仏ができる喜び。

このような信仰の集いができること、しかも音楽を通してみんなの心を分かち合えるのですから、もう待ち遠しくてしかたがなかったわけです。

詠唱会には色々な講員さんが入会しています。私にとってはみんな大好きな方々ばかりです。他宗の方も、他の浄土宗寺院の方も、僧侶も寺族も檀信徒の方もみんな一緒です。

中にはお身内の方を亡くされた途方に暮れ、淋しい思いをしていた方が詠唱の会に入会されて、大変お元氣になられたこともたくさんあります。ご主人に先立たれた方、お子さんやお孫さんを亡くされた方。女性の心、母性を詠唱はしっかり包み込んでくれるようです。

はやいもので、詠唱を初めて二十年の月日が流れました。いまではすっかり根付いた詠唱ですが、これから講員の皆さんと一緒に大事に育てていくつもりでいます。

(大蓮寺住職 蓮池光洋)



新年懇親会のひとこま。



毎月2回のおけいこ。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●本

〈特選〉

経本のルビ追う子らに汗光る

佐藤 雅子

お経の本は大人でも、仮名が振ってなければ手に負えないし、意味など、分からないのが当然として過ぎていく。この子も一心に仮名を追っているのである。額の汗がちらちらと光っている。

〈佳作〉

本堂の回廊染めて夕紅葉

大場 清

秋風やバグにひそむ文庫本

金谷 友江

十三夜本屋に友を待ち合わせ

北川 弘子

●垣根

〈特選〉

朝寒や垣根をはきみ農談義

浜口 佳春

垣根といっても高くはない。朝のあいさつが農事につながって、しばらく意見の交換などに時間が費やされる。多少の自慢を交えな

〈特選〉

荷をおろし馬の背光る秋の天

中島富士子

●自由題

〈佳作〉

がら、結構相手からいろいろの情報を得ているのである。

無住寺の虫すだく垣猫の道

桐部 千秋

茶席より琴の音流る垣根越し

細田 初枝

朝顔の垣根はるかに海の紺

河合富美枝

〈佳作〉

夏潮の色となるまで絵の具溶く

池田 伊吹

風鈴の音色操る浜の風

東 保

針の目処秋灯低く引き寄せて

藺田 郁子



自由題

新聞

台

浄土誌上句会のお知らせ

③季語ではありません

参加作品 編集部選

本

詠みきれぬ本に責めらる秋の夜
亡き人の蔵書重たく秋深し
新本も積み上げたまま古書になり
秋日濃し貸出本の手ずれかな
曝書せり褪ゆく父の蔵書印
布張りの懐かし漫画のらくろよ
本を手に居眠る学生春の昼
本棚に夢殖やしゆく良夜かな
百冊の本を売る日の秋燕
手作りの布の絵本や秋の虹
青北風の積まれし本を拾ひ読む
秋彼岸亡父の筆跡我が経本
書の文字をおいつねむる秋の夜

桐部千秋
山本美代子
中島一子
周東澄江
嶋田喜代子
飯島英徳
細田初枝
河合富美枝
柴田祐造
片桐てい女
中島富士子
山本のり子
今井恵子

垣

月よ出てませ垣根の萩すき待つ庭に
垣根にこぼれる萩の愛惜しき
垣一重飛びこえられぬ無月かな
虫の音は垣根こしなる湯舟かな
桐の木や垣根の内に一葉落つ
垣越えて朝顔の咲き盛るなり
上州や櫓の垣根の風除けに
茶の花の垣低うして親しめり
垣根越し自転車少女秋立ちらぬ
垣根越し萩こぼれ咲く山の寺
行く夏の色のこしての垣根かな

自由題

山本美代子
中島一子
周東澄江
佐藤雅子
大場 清
嶋田喜代子
金谷友江
片桐てい女
中島富士子
山本のり子
今井恵子

締切・十一月二十日

発表・『浄土』二〇〇三年一月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

母と見る真闇となりぬ鳥賊釣り火
葬送る船の混み合う梅雨波止場
魚屋の声の素通り青簾
花火待つ群集の中間の中
夕涼み点滅始む港湾灯
先ず蚊やり点けて僧侶の読経かな
相づちを打ちつつ眠る昼寝かな
鐘の音の路地にこぼるる盆の島
目を合わせ親しく会釈夏帽子
堀越えし薦の枯れゆく風の日々
下駄鳴らしゆくは父子らし月の浜
一葉だに動かぬ森や蟬時雨
虫すだく車道に流む排気ガス

佐藤まり
山口信子
井村善也
谷しげ子
加藤政男
中村真一
寺下忠至
島谷ときを
西井 正
石原 新
増田信子
寺下忠信
三橋仁平

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

奈落の底

この奈落は「ならく」と読み、意味は地獄。言葉の成り立ちは地獄を意味する梵語からの音写で、まさに仏教用語の代表選手と言ってもいいでしょう。

昔は、お寺で地獄絵図を見せながら、囃をつくと舌を抜かれるなどと和尚さんが子供たちに話をしたのですが、今のご時世では子供どころか大人にも地獄絵図を見せないといけないようです。さて、奈落だけでも奈落の底という意味もありますが、まさに落ちるところまで落ちた、どん底という意味です。



短日や編集会議に鬼笑う 岱潤

先日『べてるの家の「非」援助論』と、『悩む力ーべてるの家の人びと』という本に出会った。「べてるの家」とは、今では北海道浦河にある精神障害をかかえた人たちの有限会社、社会福祉法人の名称である。襟裳岬に程近い浦河町で共同作業所・共同住居・通所授産施設などを運営し、昆布や介護用品の販売などを手がけ、現在年商一億円、年間見学者千八百人という過疎の町を支える地場産業の組織である。

しかしその出発は、入退院を繰り返す精神分裂病の人びとが、退院している時期に暮らすための、古い教会を改装した建物の名で、本では精神障害に苦しむ人びとが、病気の回復と社会復帰という課題に苦しむのではなく、病気のままでその人を人間として認める環境、健康者と共に生きる環境を、精神科医とソーシャルワーカーを中心に患者自らが創った歴史と理念が綴られていて感動した。

その理念「弱さを絆に」「降りてゆく生き方」「三度の飯よりミーティング」「安心してサボれる会社作り」など、絶対人を切り捨てないという理念に驚きと感心をするばかりであった。

競争社会に生き、上昇観念に拘わっている現代人への、痛切な警告の書であるとも思えた。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
村田洋一
佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十八巻十一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十七年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

発行

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発着所

法然上人鑑仰会

電話〇三三三七八 六九四七

FAX〇三三三七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇八八二八七

真野龍海
佐藤良純

株式会社 シーティイー

New & Used Cars
Takata & Co., Ltd.
SINCE 1965

あなたの一台を世界から

ベンツ・ポルシェ・

フェラーリ・ロールスロイス・

国内の各ディーラーにも

在庫の無い車種でも

世界中から輸入しお届け致します。



最新在庫情報をご覧になれます。

<http://www.takataco.jp>
E-mail: union@takataco.jp

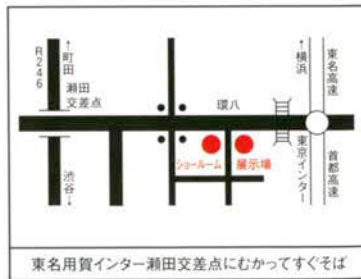
UNION

輸入元(外国自動車輸入協同組合員)
株式会社 高田商會

東京都世田谷区玉川台2-12-1 (〒158-0096)

営業時間：平日／9:30～20:00 日祝／10:00～18:00
定休日／年中無休

☎03-3708-1911 FAX.03-3708-2066



東名用賀インター瀬田交差点にむかってすぐそば

SHUKUTOKU GAKUEN 2003

110TH
SINCE 1892
SHUKUTOKU GAKUEN



暖かさと一緒にある教育。

淑徳学園

中学校・高等学校

●見学・相談会は随時
受け付けております

「お知らせ」
高校の制服が
新しくなります。

■学校説明会(高校受験)

11月16日(土)13:00～
11月23日(土)13:00～
12月1日(日)10:30～
12月7日(土)13:00～
12月8日(日)10:30～
1月11日(土)13:00～

■学校説明会(中学受験)

11月16日(土)13:00～
11月23日(土)13:00～
12月1日(日)10:30～
12月14日(土)13:00～
1月11日(土)13:00～

淑徳学園

中学校・高等学校

〒112-0002

東京都文京区小石川3-14-3

Tel.03(3811)0237

<http://www.shukutokugakuen-jh.ed.jp>